

風土



筆あそび

神蔵

器

退院すこたびは酒中花の迎へ

筆あそびして老梅の未開紅

初桜集乳缶の峠越す

三月や鳶も海より陸を恋ふ

一円相結ばれてをり西行忌

朝寝して竹の太根の墓浮かす
御仏の半歩踏み出す花の雲
死におくれ千鳥ヶ淵に夕桜
一山の桜に脚下照顧かな

飯田龍太先生

花冷す三十五日足早に

鎌倉霊園

桜濃し墓にきざみて「恩」とのみ
どの墓も胎児のごとし花吹雪



春遠からじ

— 小野寺節子 —

行く秋を追ふオホーツクの波頭
湖れゐるごとく暮秋の国後島
「小清水」の花野の果に波吠ゆる
どさん娘と名刺を交す星月夜
網走の隠れてやまぬ秋の声
夜半の秋一期一会のちやわん酒
知床の紅葉隠りのけものみち
知床の熊さんいづくへ紅葉狩
ひたすらに鮭さかのぼる野辺の川
人の声きく耳もたらず鮭のぼる

神の留守縄文遺跡の大地踏む
子供の墓てふ埋設土器や目の寒し
縄文の「むら」をこの目に冬すみれ
帰り花遺跡百里の道しるべ
神立にあらぬに臨時十二湖駅
「十三の砂山」うたふは風かしぐれかな
袖しぼる津軽三味線の音山茶花散る
古城守る桜紅葉の散る月日
冬たんぽぽ父が生まれし館跡
父母のふるさとよ春遠からじ

竹間集

同人作品



春光

鈴木石花

残雪の浅間遠見に県都まで
県庁より上毛三山冴返る
片栗の花の一つに跪く
春光や器師傘寿の誕生日
高層のマンシヨン完売春燈
わが町の安吾記念日二月尽
五十回の結婚記念やひひなの日

敦盛の笛

山路

紀子

土雛を戸毎に三州足助かな
塩街道馬継宿や雛飾る
土雛の敦盛笛を抱きをり
家康の大樹寺の見え風光る
春霞ぬけ岡崎城天守閣
舩を挿す西行岩のあたりより
夕月は空のぼんぼり雛桜

春の大河

岩木

茂

猪吊す在原に業平の墓
縮緬のやうな湖春の鴨
行商の荷が古草の上を行く
囀りや胎児が腹を蹴るといふ
雪折の枝すさまじき大江山
むらさきにみづうみ昏るる花菜畑
滔々と春の大河や義民塚

山河集

同人作品



神蔵
器選

種を播く大きな事の始まりぬ
墓出でて不老不死たる面構
生涯に亀鳴く声を聞きもらす
かたくりに屈み万葉言葉かな
行く雁を誰もが仰ぐ一揆祭

天野みゆき

鶯や女手に継ぐ桐生和紙
父母の山近づけて目貼剥ぐ
男帯織りて三代松の芯
嶺幾重水一筋に春兆す
透明な傘たたむとき春の虹

小林和子

料峭や空へ野火止雑木林
業平塚に松一本や草萌ゆる
ごうごうと野火止塚や木の芽立つ

布施まき子

春耕のころがる大地力持つ
啓蟄や武蔵風土記の畦歩く

奥山
絢子

二ヶ月の宙を入れたる志野茶盃
古き世の朧月夜や奈良七寺
たまきはる蛇笏墨書や冴返る
春の蚊のうつうつ来たり打ちそこね
少年の一人沖ゆく春の海

菅原
末野

道すがら糸通し買ふ初不動
かまくらの「はいつてたんせ」入りにけり
湖を発つ鳥の助走や葦の角
古草や縁切寺の奥の院
地長押の卍くづしや冴返る

◇特別作品◇

蓑虫庵

吉田郁子

蓑虫庵真先に出さる春火鉢
春障子談笑続く蓑虫庵
蓑虫庵お茶の由来の終りなく
風光る釣月庵の薔窓
竹の秋土芳の墓を猫よぎり
切り貼りのある釣月庵の春障子
椿落つ土芳の墓に重なりて
談笑の蓑虫庵に茶の由来

春一番塗り替へられし投句箱
踏まれたる鍵屋の辻の落椿
蓑虫庵真中に座を占む春火鉢
梅苑の清正像に迎へらる
梅の花清正像の肩に落ち
梅の香に包まれ気儘一人旅
伊賀線はワンマン電車春時雨
春の蚊を打って近づく遺髪塚
厨房に立つ男の料理春の夜
山茱萸に夜来の雨の雫落つ
春落葉杖衝坂を喘ぎ行く
蛇穴を出づ伊勢街道の径の辺に

風土集



神蔵器選

冴返る一番星の彼方より 東京 林いづみ

春荒れの甲斐に用あり急ぎをり
まばたきの戻るや狐川温む

雪割草涙のあとの泪かな
二月逝く訃報一つを置き去りに

ミステリー旅行に赤き寒の月 上尾 根岸善行

とんどの火下谷神社の大鳥居
水の上を風わたりくる冬牡丹

白梅の空のあをさに溶けこまず

おしやべりを星へ譲れりいぬぶぐり
ふらここの頂点に置く少年期 川崎 北島和英

耕して一尺五寸の土煙

七輪に醬油焦がせし春隣

いつぶくの指より香る蓬草
鳶の笛春の水面の風となり

割り箸を音立てて割り二月尽 京都 杉本葉子

菜の花の茎太きまま食べにけり
身を焦がす一網打尽の蜚いか

飯粒を杓文字より取り雛の日
春一番婦人服売場に待たさるる

合鐘カウシの響く小島や春来る 横浜 近藤幸三郎

汗を取る平太の面冴返る
金平糖の影が角出す春二番

佐保姫の下に鷗の集ひけり

海光の耀ふ生寶水温む
楮晒す寒明けの水迸ばしり 京都 橋添やよひ

春燈や正子全集十五卷

序列おく太閤梅や蕊を張り

初午やおかげ横丁深入りす
源平梅すでに紅白香を放ち